



日本バイオテクノファーマ株式会社
CEO 篠原 直樹

米国モンサントカンパニー 医薬品事業部(現ファイザー)へ入社。その後、ヘッドハンティングにてアベンティスペーリングジャパン(現CSLペーリング)へ入社し、2016年にバイオ系製薬会社日本バイオテクノファーマ株式会社を設立。同時期に医療コンサルティングファーム ネクストイノベーションパートナーズ株式会社を設立。現在2社の経営をしている。

思いを育て、具現化する。

バイオ医薬品・体外診断薬の開発等を手掛ける日本バイオテクノファーマは、がんやリウマチなどの治療に用いられる抗体医薬品を製造する事業に心血を注ぐ。また社会保障費の増大、医療格差などの課題解決にトライする新規事業も次々に打ち出している。常に新鮮な気持ちで、未踏の道に果敢に踏み出す同社の篠原直樹代表の原動力はどこにあるのだろうか。

TEXT BY Yu Yamatani INTERVIEW BY Mariko Ooyama PHOTOGRAPHS BY NAITO DIRECTION BY Motonobu Machida

メイドインジャパンのバイオ医薬品を

篠原氏は大学卒業後、外資系製薬会社勤務。世界中を飛び回り、多くの研究者や医師と関わる中でプロフェッショナル達の仕事への誇り、医療発展への思いに感銘を受けた。また医薬品が人類にもたらす貢献と、医学の進歩への信頼や期待も強く持つようになった。

しかし一方で、バイオ医薬品などの価格が高騰し、患者が大きな負担を抱え、社会保障制度にも影響を及ぼしかねない状況を危惧するようになった。「このまま薬を販売しているだけでよいのか」「自分は仕事で社会に良いものを残しているのか」との思いは次第に強くなっていくのだった。

「リスタート」のきっかけは、ある学者からの一言。薬価が高騰する理由の一つに挙げられる日本のバイオ医薬品開発の立ち遅れについて語り合う中で、「君が作ればいい。もしやるなら応援するよ」との言葉をもらったのだ。思いもよらぬ提案だったが、心のもやもやが一気に晴れた。周囲から「絶対に無理だ」と忠告を受けながらも、起業の決意を固めたのである。

同社は2016年8月に設立。米サンフランシスコに研究所を置き、関節リウマチなど免疫系疾患やがんの治療に使われる数々のバイオ後続品(バイオシミラー)の製造に成功した。分子量が大きく構造が複雑なため、決して容易な製造とはいかない。また厳格な審査も必要とされるバイオシミラーの製造だっただけに、コストを抑えながら技術力を発揮できたことには、篠原氏自信も大きな自信を持つきっかけとなった。

医療の社会課題解決にチャレンジ

篠原氏が、医薬品製造のこだわりと同様に

大切なことだと考えるのが、疾病の早期発見や、予防医学による健康寿命の延長だ。同社では抗体技術をいかし、アルツハイマー病やパーキンソン病を予測する体外診断検査キットなどの開発も展開している。

「例えばアルツハイマーは、本人だけではなく介護をされる方にも大きな負担がかかる疾病です。発症の可能性を高める危険因子は特定が進んでいて、予防薬や予防行動でリスクを軽減できるようになりました。私たちの持つ技術が、患者とご家族の幸せに大きく寄与すると考えています。2020年には新型コロナウイルスの抗体検査キット・抗原検査キットを開発。そのほかにも従来と全く異なる視点から、医療の問題解決にチャレンジする事業も開始したという。それはオンラインクリニックのシステム開発だ。同事業も、篠原氏が勤務時代に漠然と抱えていた疑問から始まっている。

「私は仕事柄ドクターの知り合いが多く、友人の親が病気になる時などに手術の実績が高い医師を紹介することがありました。しかし、そのような人的ネットワークがある人となし、住んでいる地域などで受けられる医療が変わることに、どこか心の引っ掛かりを感じていました」。

同社では、心臓外科や呼吸器外科、脳外科などの高い手術実績をもつ医師と全国の患者をつなぎ、患者の近くの病院で手術できるよう、日程調整などを行う医療サービスを構想している。

ただし、これは篠原氏が思い描く完成形ではない。「理想はオンラインで保険証の登録から診療、処方や手術のスケジュールリングまで行えるバーチャルクリニック。しかしそれは現在の日本の法律では認められていません。コロナでも注目されたオンライン診療の利便性が

広く認められれば、制度改正の流れもできるかもしれない。その一歩を踏み出す事業だと考えています」。

自分の思いを素直に出せる世の中に

篠原氏の仕事の原点には「なぜなのだろう?」という疑問や違和感、「こんなものがあつたらいいな」「こうすればもっとよくなる」という率直な思いがある。その際、まずは可能・不可能は考えない。損得勘定も、所属組織や業界のしがらみも、そこにはない。

そして、その思いを素直に口にし、一歩踏み出してみると気づくことがある。「業界の常識、慣習とは異なることでも、情熱やポリシーを持ち人に伝えること。実は自分もそう思っていた』でできることがあればぜひ応援したい」と後押ししてくれる人が現れるものです。決して自分は「人ではない」ことに気づくのです」。

篠原氏は現代、特に日本の社会について「自分が感じたことをそのまま出して生きられない時代ではないか」と懸念する。だからこそ、自分自身が心の声に忠実に、チャレンジし結果を出したいと突き進む。「使命感と言うとおこがましいですが、私が思いを具現化していくことで、次の世代の人が歩きやすくなればという思いはあります。今の社会に同調圧力や生きづらさを感じている人にも『世の中はそんなに暗いものでも、つまらないものでもない』というメッセージを伝えていきたい」と笑顔を見せる。

明るく語るビジョンには、私たちが素直に自分自身の心の声に向き合い、今すべきこと、したいことは何だろうと問いかけさせる力が潜んでいる。その小さな心の声を大切に育てることで、人はいつでも新しいスタートを切ることができるのかもしれない。

